様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３７３０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０４５１

研究課題名（和文）元曲・崑曲の歌唱及び韻律の研究

研究課題名（英文）Research of Singing and Meter of Yuan Opera and Kun Opera

研究代表者
石井　望（Ishiwi, Nozomu）

長崎純心大学・人文学部・准教授

研究者番号：５０３４１５５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：元曲・崑曲は近世チャイナ文藝の中で高い地位を享受し、諸名作を産み出して來た。その作品は歌唱するために作られたものである。本研究は元曲・崑曲のメロディーを中心とする音樂・韻律を明らかにするため、古歌譜(樂譜)・音階・字音の三方面から研究した。歌譜は特に最古の元曲譜「北西廂訂律」にもとづくメロディーの復元を中心とした。「北西廂訂律」はこれまで代表者が部分的に研究を進めて來たものである。音階は崑曲の均孔笛を機器吹奏し、CTスキャン撮影を行なふなど測定面から探究し、唐の音階を簡便化したものであることを明らかにした。また明朝の「中州全韻」を研究することにより、崑曲字音の體系を明らかにすることを目指した。

研究成果の概要（英文）：Yuan Opera and Kun Opera are created for singing. My research starts from three aspects: music sheets, music scales, and Han charactor pronunciations. My purpose is to search music melody, tone patterns and meters in Yuan Opera and Kun Opera. I restore their melodies using the oldest Yuan Opera music sheet "Pei si siang Ting lu", which I have researched for several years. Its music scale is based on the flute finger holes which equally disposed. This time I have scanned them with micro scanner, also blowed them with blowing machine and recorded the data. I have detected that finger holes disposition was simplified from Tang dynasty's Chiak Pat (Shaku hachi in Japanese), and that Kun Opera's Han charactor pronunciations is based on "Chungchou Chuanyun", the pronunciation book of Ming dynasty.

研究分野：各国文学・文学論

科研費の分科・細目：中国文学

キーワード：崑曲　昆曲　昆劇　崑劇　尺八　オペラ　音韻　曲韻

１．研究開始当初の背景

崑曲は地方劇ではない。明朝以來の名作「牡丹亭」「桃花扇」「長生殿」などの原著は崑曲である(もしくは崑曲として初演された)。崑曲は京劇などの地方劇よりも上に位置する文藝として數百年間尊崇されて來た。崑曲以前に上位に奉戴されてゐたのは元曲である。そのメロディーは崑曲の中に這入って北曲となったが、原メロディーではないとするのが四百年來の定説であった。明朝人の「今の北曲は古北曲に非ず」といふ言葉が著名である。しかし實はほぼ原メロディーのまま留存してゐることが、本代表者の二十年來の研究によって明らかになりつつある。

崑曲に對する注目度は近年とみに高まり、ユネスコ世界無形遺産の第一次登録に於いて能樂を凌ぎ第一位で當選するに至った。近年坂東玉三郎氏が蘇州に長期逗留して崑曲を學び、蘇州及び日本各地でその成果を上演したことはマスコミにも大々的に取り上げられて記憶に新しい。しかし坂東氏は精緻な研究結果に基づいて上演してゐるわけではなく、研究の必要性は益々高まるばかりである。上演に於ける問題は主に字音と音階である。字音で最も重要な清濁(即ち陰陽)は全く反映されず、音階も西洋式である。これは坂東氏の責ではなく、今日の崑曲が自己の價値を喪失しつつあるがゆゑの問題である。私は一研究者としてこの現状に責任を感じてゐる。

２．研究の目的

元曲・崑曲は近世チャイナ文藝の中で極めて高い地位を享受し、諸名作を産み出して來た。元々その作品は歌唱するために作られたものである。本研究は元曲・崑曲のメロディーを中心とする音樂・韻律を明らかにするため、古歌譜(樂譜)・音階・字音の三方面から研究する。

歌譜は特に最古の元曲譜「北西廂訂律」にもとづくメロディーの復元を中心とする。「北西廂訂律」はこれまで代表者が部分的に研究を進めて來たもので、今後三年間でこれを更に進める。　音階は崑曲の均孔笛を機器吹奏し、CT スキャン撮影を行なふなど測定面から探究し、唐の音階を簡便化したものであることを明らかにする。

餘力が有る場合は字音について、明朝の「中州全韻」を研究することにより、崑曲字音の體系の全容を明らかにすることを目指す。

３．研究の方法

古歌譜(樂譜)・音階・字音の三方面から元曲・崑曲を研究する。

歌譜　　現存最古の元曲工尺譜「北西廂訂律」(明・胡周冕著)の各曲牌メロディーを、清初の元曲工尺譜「北西廂絃索譜」(沈遠・程清共著)及び清末民國初の崑劇北曲工尺譜寫本と比較する。メロディー比較の對象として、「九宮大成譜」が著名だが、文人の曲律思想による校訂を經てをり、自然な傳來譜そのままではない。王季烈「集成曲譜」も著名だが同様である。また近年はじめて世に出た「故宮珍本叢刊」所收の工尺譜は、文人の校訂を經たものと經てゐないものと兩方を含むやうである。兩者の差は、文人譜では四聲陰陽を明確化するために共通メロディーを犠牲にする場合が多いのに對し、民間寫本譜は四聲陰陽の規則性が緩やかである一方、曲牌ごとのメロディーは千篇一律であることが多い。兩者が各譜本に含まれる割合を統計することは至難だが、概ね文人的傾向の強い譜に對しては愼重な扱ひにとどめ、埋もれた民間譜を出來る限り多數蒐集して比較に役立てる。共通メロディーが千篇一律であるわけは藝人の間に廣く流布してゐたからであり、相對的に古いメロディーと考へるべきである。それが元代の「中原音韻」の高低の記載に一致することは、これまで數種の曲牌について確かめて公表した。中でも重要な「北西廂訂律」のメロディーは平成十九年以來部分的に研究成果を發表したが、本課題では更に一つづつ曲牌の比較を進める。

音階　　これまで測定した外に存在の知られる舊時の崑曲勻孔笛は、臺灣所藏の四管が確實なものである。また北京には必ずしも崑曲笛ならずとも明朝清朝の勻孔管の多數所藏情報がある。本研究は笛の所有者を日本に招き、機器吹奏を行なふとともに初めて CT スキャン撮影を行なふ。測定結果に據り、中世の音階が崩れた形で近世崑曲の活音階となってゐることを檢證する。

測定と併せて文字史料による檢證も重要である。民間寫本譜から調高の記載を蒐集し、中世の音樂論書の調との關係を明らかにする。崑曲以外の勻孔笛も比較のために不可缺だが、明朝「南雍志」所載の笛・洞簫、及び李氏朝鮮「樂學軌範」所載の唐樂洞簫には孔間距離の尺寸が均等に記載され、崑曲笛と類似してゐる。よって度量衡研究論文を參考にこれら笛・洞簫の現代尺寸を推定し、アクリルで模造して機器吹奏を行なふ。

明朝「中州全韻」研究　　明末范善臻「中州全韻」を全貌を明らかにする。「中州全韻」は崑曲中の北曲の字音體系を完成させた韻書である。范善臻は絃索及び崑曲の歌ひの達人として當時著名であり、呉音の色彩濃い蘇州派絃索の盟主であったことは拙著「呉下北絃歌派考」にて既に論じた。その歌法の基準として編まれた「中州全韻」は、各地に寫本として藏せられる。中州全韻の聲調は陽上聲を缺く七聲だが、中州全韻から派生した清朝の沈乘麟「韻學驪珠」・王鵔「中州音韻輯要」・周昂「新訂中州全韻」の三書では陽上聲を取

捨相半ばする形で取り入れ、八聲とも七聲ともつかぬ不安定な體系となってゐる。これは三書が切韻系統及び土着古語の影響を受けたためであり、崑曲字音體系が陽上聲を排除するのとは方向性が異なる。崑曲の規範は中州全韻の七聲であることが、各音節の對比により明瞭になるだらう。

４．研究成果

平成二十三年度は、崑曲の字聲が通説の八聲でなく實際は七聲である證據を集め、「中州全韻以下崑曲無陽上聲辨」(全)として公刊した。明末『中州全韻』の本質を明らかにした著作である。また明末清初の「北西廂訂律」の古樂譜を含めて「落梅風」曲牌のメロディーを求めた舊作論文「落梅風求腔」(全)を大學紀要にて公刊した。「落梅風」は元曲(北曲)曲牌の一つであり、元曲メロディー復元が一歩前進したことを示す。以上いづれも前年に一部分のみ紀要に掲載してゐた論文を全文掲載したものである。

また崑曲の歌譜の遺存情況を探求した成果を「上海圖書館藏崑曲工尺譜目一」(王宏撰、石海青訂)として公刊した。この目録は今まで世に知られなかった新消息を多く含んでゐる。また崑劇の歌唱法がイタリア歌劇の起源となった可能性を論じ、「意國歌劇發軔於耶蘇會士西傳崑劇説」と題して公刊した。メロディーよりも歌詞の聽き取り易さを重視する價値觀などに於いて兩者は類似してをり、且つイタリア歌劇草創期は丁度明朝の海禁が緩んで西洋の貿易商人が寧波などに居留し始めた數十年後である。確かな史料が有るわけではないが、山水畫の西傳と同樣に必ず誰かが立てるべき新説であり、今後の議論の資として極めて重要である。

平成二十四年度は顧再欣氏の藏笛三管にＣＴスキャンを行なった。顧再欣氏は蘇州崑劇院の元首席笛師である。顧氏は亡父の用笛など西洋化以前の稀少な崑曲笛三管を攜へて來日し、石井がこれを福島ハイテクプラザの東芝ＣＴスキャナーで撮影した。また壓縮空氣による機器吹奏を以て音響を測定した。

また東京藝術大學「第十回日中音樂比較研究國際學術會議」にて、「論正倉院尺八名稱及形制之源」と題して口頭發表を行なった。論じた内容は、第一に「龠・笛」の二字の古音はともに「diak」で一致すること、龠が漢代以前に忘れられたため、西域の胡笛が傳來した際に「笛」が新たに造字されたこと。第二に正倉院尺八及び室町以後の和尺八はともに吹孔を外から斜めに切った形状であるため、和尺八の起源は正倉院だとの謬説が流布してゐる。しかし後漢から唐末五代までの史料では外から切る形状は普遍的であり、同じ音樂文化圏の産物に過ぎず、和尺八が正倉院から來たとは言へないこと。第三に林謙三は正倉院尺八の孔制が晉の荀勗に由來するとしたが、荀勗船は儒家の三分損益音階であり、正倉院と一致しない。隋唐俗樂音階は龜茲起源の大印度文明圏的特色であり、儒家起源ではないこと。

平成二十五年度は臺灣國立中央大學の洪惟助教授を招聘し、同じく撮影・計測を行なった。また撮影電子データにもとづき、長崎ｅタウン組合の厚意により３Ｄプリンターで復元を試みた。データ通りの高精度では復元に膨大な時間を要するため、やや粗い0.2㎜ ごとの精度を用ゐた處、吹孔の形状などが理想通りとならなかったが、逆にそれにより復元のための課題が明らかになった。復元課程は長崎 KTN テレビ局（フジテレビ系）の取材を受け、本報告提出後の六月十八日に放送される見込みである。

以上の撮影と測定の意義は主に三つ。第一に西洋化以前の崑曲笛は今や滅びつつあるため、その形状を精密に保存すれば將來３Ｄプリンターなどで復元できる。第二に撮影の經驗を活用し、將來正倉院尺八の撮影に進むための準備となる。第三に西洋化以前の崑曲笛は平均指孔であるが、その排列數値は西暦千五百四十四年の黄佐著『南雍志』に既に見えるもので、孔位比率は現存の西洋化以前の崑曲笛と一致する。音階としては單純に下二孔をシ・ファの音に充當して活態で轉調し易くしたもので、唐人二十八調（＝正倉院尺八）の活音階から更に活態の度合ひを深めたものだと考證できる。東洋音階史の全貌を描き出すために必要なのが本研究の測定であった。

全期間を通じて副産物として著述した成果も重要である。漢文圏に於ける崑曲といふ文藝の位置づけを定めるための副産物として、漢文圏そのものの文明史的位置を論じて「大印度小チャイナ説」として公刊した。また崑曲の匀孔笛に類似する孔位の琉球笛を探求する前提として、どこからが琉球國でどこまでが明國清國であるかといふ根本問題に逢着し、副産物として『和訓淺解・尖閣釣魚列島漢文史料』などを公刊した。また長崎唐館に於ける崑曲の記録を探る副産物として「南蠻醜類榜―唐館前史から明治の吉利支丹まで―」などを公刊した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　件）

「大印度小チャイナ説」、霞山會『中國研究論叢』第十一號、頁百五十三至百七十四、平成二十三年九月。

「上海圖書館藏崑曲工尺譜目一」(王宏撰、石海青訂)、『純心人文研究』第十八號、平成二十四年二月、右頁二十一至二十四。（石海青は研究代表者の筆名）

「落梅風求腔」、長崎純心大學人間文化研究

科『人間文化研究』第十號、右頁一至十四。

「意國歌劇發軔於耶蘇會士西傳崑劇説」、長崎純心大學『カトリック社會福祉研究』第十二號、頁百九十一至二百四、平成二十四年三月。

〔学会発表〕（計　１件）
「論正倉院尺八名稱及形制之源」（石海青）、「第十回日中音樂比較研究國際學術會議」、平成二十五年三月二十七日、東京藝術大學。

〔図書〕（計　　件）

『和訓淺解・尖閣釣魚列島漢文史料』、長崎純心大學比較文化研究所、平成二十四年三月、全二百五十一頁。

『純心科研論文集第一號』、淺野ひとみ・石海青共編、平成二十五年三月、長崎純心大學刊。所收論文は「測笛記略」・「曲笛裏的韻味」・「笛事人事略述」・「醫療用ＣＴ機を以て崑曲笛を撮影する齒科用ＣＴスキャナーを以て崑曲笛を撮影する」・「崑曲博物館藏の傳字輩匀孔笛をＣＴスキャン撮影する」・「三次元非接觸計測器を以て崑曲笛を撮影する」・「文化財用レントゲン機を以て崑曲匀孔笛を撮影する」・「家庭用スキャナーで笛孔を撮影する」・「東芝ＣＴ機を以て崑曲匀孔笛を撮影する」・「東芝ＣＴ機(福島)で崑曲笛を撮影する」。論文共著者は周曉・李殿魁・久永眞一郎・冨永尚宏・田中美香・吉井康史・肥後陽介・吉田竜也・森下諒一。

「南蠻醜類榜―唐館前史から明治の吉利支丹まで―」、所載書は『長崎東西文化交渉史の舞臺、明清時代の長崎、支配の構圖と文化の諸相』、平成二十五年九月、勉誠出版。

『純心科研論文集第二號』、平成二十六年三月、長崎純心大學刊。所收論文は「詩餘浪淘沙入劇考」・「崑曲入聲分合辨」・「簡述王傳蕖、華傳浩舊時用笛來歷」（研究協力者・洪惟助著）・「論正倉院尺八名稱及形制之源・正倉院尺八の名稱及び形制の源を論ず」・「北曲古腔研究始出年月日自述」・「呉門求古----我和崑曲的二十三年」・「崑曲名師高慰伯先生與浪淘沙」。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

無し

６．研究組織
(1)研究代表者
石井望（ISHIWI, Nozomu　　）

研究者番号：　50341558

(2)研究分担者
無し（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
無し（　　）

研究者番号：